

明治22年1月15日、「おさしづ」により兵神分教会が設立され(3月13日地方庁認可)開筵式は6月2日に行われた。今回は、開筵式前後の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治22年5月20日：増野正兵衛神戸へ帰る御許し願
- ・5月25日(陰暦4月26日)：兵神分教会新築落成に付区役所へ届済、この段御礼申上げ、就ては開講式の儀は陰暦五月五日六日両日御許し願／押して日の処陰暦五月五日、六日の願／分教会所めどうの処、赤衣は又一日の日があると、郡山分教会のおさしづに御聞かせ下され、よって御鏡をめどうと致し居ります。御心をうつし下されますのに、おぢばへ持ち帰り、本席へ御願ひ致して宜しきや、世界の事情で御うつし下されますや伺／御勤御面の処は郡山分教会所より伺の節に、御許し無之旨承り恐入ります。就ては悪しき払、一寸咄、甘露台、十二下りよろづよ、この御勤さして貰いましても御許し下されますや伺／御勤の人衆は男は黒紋付袴、女は紅色の衣服に白かり絹を掛け、赤袴、髪は下げ髪にしても宜しく御座りますや、おぢばの型通りして宜しきや、御許し願／十二下り御勤は六人一勤、三人一勤という事承り、講社の人数も多人数であります、六人の処九人、九人の処十二人位として、理が外れるものでありますか願／開講式に付、参詣人に御酒御鏡餅一寸印だけさして貰いまして宜しや、人間心で先見えぬ故伺／遠方講社より分教会所へ寄進なし下されし人に、受取証書出して宜しきや伺／同日、兵神分教会新築落成に付、本席を一度招待仕り度く御出張御許し願
- ・5月26日：増野正兵衛前さしづより前の障り伺(五月二十二日左の頭のぼせ耳が鳴り、二十三日夜俄に胸先へ厳しく迫り二十四日宜しく、二十六日右の手先の痛みにつき伺)／同日、増野正兵衛身上障り伺
- ・5月27日(陰暦4月28日)：兵神分教会開講式に付、御出張御許し下さるよう前以て願
- ・同日：清水与之助身上障り伺
- ・同日：増野正兵衛婦神の事御許し願
- ・5月30日(陰暦5月1日)：兵神分教会おさしづに、元々ぢば一つつとめ六名のおさしづの趣、周旋方一同へ談じ、一日の日開講式六名へ談示し、後々定め方に付願／清水与之助寄留箱か本籍かを以て分教会へ入込んで宜しや伺／前川菊太郎出張御許し願
- ・同日：兵神分教会所へ清水与之助引移り願
- ・6月1日：中山会長兵神分教会開講式に出張御許し願
- ・同日：松村吉太郎兵神分教会開講式に付出張の暇願
- ・6月15日(陰暦5月17日)：兵神分教会開講式御礼申上げ、後々順序の儀、清水与之助、増野正兵衛、岩崎新兵衛の三名より総代にて願、講社一同協議では毎月三度説教、中山会長よりは、警察署の内達の廉も有之に付、毎月六度、どちらを御許し下されますや伺／そうなれば月の三日、十三日、二十三日の三日御許し願／毎月陰暦二十三日月次祭御許し願
- ・同日：兵神分教会新築並に開講式等結構に相済み、信徒寄付金余りありますよって、後の日々入費に借家二軒建る事御許し願／同普請並に井戸の御許し願

・同日：増野正兵衛前々おさしづ御聞かせ下されし処、毎々帰りまして恐れ入りますが、分教会の処談示もありますに付、帰る事御許し願

まず、5月25日の「おさしづ」では、兵神分教会の開筵式に関する具体的な事柄が尋ねられている。日柄については、まず「さあ〜やれ〜の日、ぢば治まった」と述べられて、みんなの心が定めた日として「何時なりと吉き日を以て心置き無う」と許されている。また、お目標様については「心、心がめどやで」と諭され、おつとめの形式については「鳴物一切許す。日々に勤め居る通り許し置こう」と述べられている。

おつとめ奉仕者の服装については「さあ〜どんな事して悪いとは言わん。元一つ世界その理に計り出せ」と「元一つの理」について説かれている。人数が多いことから6人で勤めるところを9人や12人にして良いか何うと「六だ一つ理、それより理を始める」と「六」の意味合いについて論されている。そして、参拝者に対して酒や餅を振る舞ってもよいか何うと「随分の理を以てする」や「随分々々長くの理をするがよい」という言葉があり、分相応に長く続かかちを説かれていると解される。遠方の人が寄付金を送ってきたことに受取書を出してよいか何うと「さあ〜そら心だけ〜」と述べられ、本席の出張を願うと「一度席許そう」と許されている。

正兵衛は3日前の22日から身上患いが続いており(頭のぼせ、耳鳴り、胸先迫り、右の手先の痛み)26日に伺っている。「よう〜夜に〜理が無くば暗くて通れん」と「夜の理」について述べられ、さらに「成る一時というは一時成る理、今尋ねる処の事情は運ぶ〜」と一時的ではない「運び」について論されている。また、27日、本席の出張について改めて何うと「一日の日、朝の理があれば、真実理を以て尋ねるなら、出にゃならんと思えば十分の理」と「朝の理」について述べられている。同日、清水与之助の身上障りについて何うと、「世界よう〜夜から始まる」や「夜々処通り難い。世界という、前々古き論聞かしてある」と述べられている。30日には、前の「おさしづ」をもとに6名でおつとめをすることを談じた上で何うと「初まりの理を始め掛け」と仰せられつつも、「日々寄り来る道の理を見て、応法一日の日の処、すっきり委せ置こう〜」とも述べられている。

このように「正兵衛の身上」「兵神分教会への本席の出張」「おつとめの人数」と一見異なる話題の中に「夜」や「朝」の言葉がそれぞれ登場しており、同じ意味合いを伝えているようにも思われる。すなわち、泥海から道具をそろえて人間を創造してきた親神の苦勞、誰もついて来る者のいなかった中から道をはじめた教祖の苦勞、そうした親の苦勞の上に今日が成り立っていることへの自覚が促されているのではないだろうか。

6月15日、開筵式を無事に勤めたお礼と共に今後説教日を毎月三度設けることを何うと「定めて三日、それでよい」と仰せられ、また押して月次祭の日が23日で良いか何うと「さあ〜三日の理を以て治め方、いつ〜までやで。三日の理を治め掛け」と「三日の理」について論されている。この「三日」も元の理に基づくものであろう。

同日、正兵衛は神戸に戻ることを伺っているが、割書きを読むと、おぢばを離れることについて正兵衛が重く受け止めている様子が伺える。「心通りに許して置こう」と仰せられている。